

発行 加古川市教育委員会 加古川市加古川町北在家23-1
編集 生涯学習推進室 電話 21-2000 (代表)
27-9349 (直通)

加古川市の指定文化財

加古川市の指定文化財に、経典3件と
絵画1件の計4件が、新たに選ばれまし
た。これで加古川市の指定文化財は合計
42件となりました。

大般若経

報恩寺(平荘町山角)

報恩寺所蔵の大般若経は、
504帖が保存されています。奥
書から宝治元年(1247)書写
製作のものが497帖、正安3年
(1301)書写製作のものが6
帖、版木で刷ったものが1帖
あることが分かりました。さら
に奥書から、このお経が最初
は現在の中町にある一宮天
神社にあったことが分かりま
した。しかし、この経典が報
恩寺にもたらされた由来まで
は分かりません。

大般若経は、宝治元年書写
経に欠本が生じたため、それ
を正安3年に補い、さらに版
経で補ったと考えられます。

経箱の蓋裏書に享保7年
(1722)の補修銘があり、報
恩寺所蔵となった時期が想
定されます。また、卷子本か
ら冊子本に改装されたのも、

この時の補
修によると
考えられま
す。

経典の書
体は平安時
代の字体を
引き継いで
いるとともに、鎌倉時
代の字体の
力強さを加
味した優品
であると言
えます。

大般若経巻第九十七

報恩寺(平荘町山角)

金泥で書かれた大般若経
で、1巻のみが現存してい
ます。

経典表紙には、別筆で「口
(岡?)松院」の墨書があり
ます。この経典は平安時代の

釈迦如来座像及び十六羅漢像

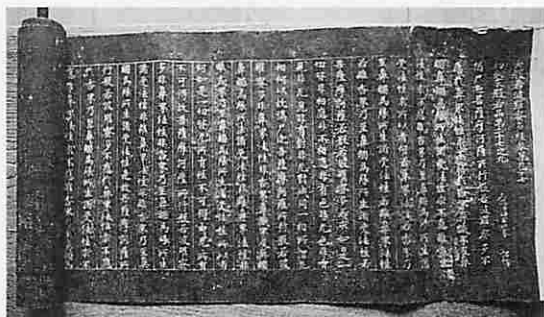
鶴林寺(加古川町北在家)

釈迦如来座像は、樹下説法
図です。ふくよかであるが、
その凛とした表情に時代を感
じさせるものがあります。鎌
倉時代の画風がよく残る貴重
な絵画と言えます。

十六羅漢像は現在、一幅を
欠いています。当初は仁王門
上樓に掛けられていたと考え
られます。画風は和様化する
大和絵羅漢画像の古い様式を
示している優品です。



▲ 大般若経巻一(宝治元年書写製作)



◀ 大般若経巻第九十七

平家納経風な華麗さは見られ
ませんが、その時代の優雅さ
と鎌倉時代の力強さを表現す
る書体が見られる優品です。

妙法蓮華経

鶴林寺(加古川町北在家)

金泥で書かれた法華経巻で
4巻が残っています。その文
字及び装飾絵画は、経年変化
により傷んでいます。平家
納経を思わせる装飾の華麗さ
と文字の流麗さが見られま
す。また、巻軸の両端の金具に
施された花弁も繊細な仕上げ
となっています。平安時代の
優美な趣を伝える経巻です。

次ページへつづく

新たに大般若経(報恩寺)など4件

妙法蓮華經第四卷卷首



釈迦如来座像



弥生時代後期の溝

美乃利遺跡発掘調査

美乃利遺跡は加古川町美乃利～大野に所在する弥生時代～中世の集落跡として知られています。今回の調査は、敷地造成工事ともなうもので、平成13年11月21日から12月6日まで実施しました。

主な成果は、弥生時代後期の溝2条と掘立柱建物跡の可能性のある穴などです。溝は幅2.5㍍、深さ0.5㍍のものと幅1.5㍍、深さ0.5㍍のもので、弥生時代後期の**かめ**・**つぼ**などが発見されました。

穴は灰色の土で埋まっています。直径15～20㍍で、4個の穴が一定の間隔で並んでいたほ

か、数カ所で穴が見つかりました。

調査範囲が狭かったため全体が分かりませんが、掘立柱建物が存在した可能性もあると思われます。



県指定・阿弥陀三尊来迎図(神吉常楽寺)

文化財シリーズ・テレホンカード



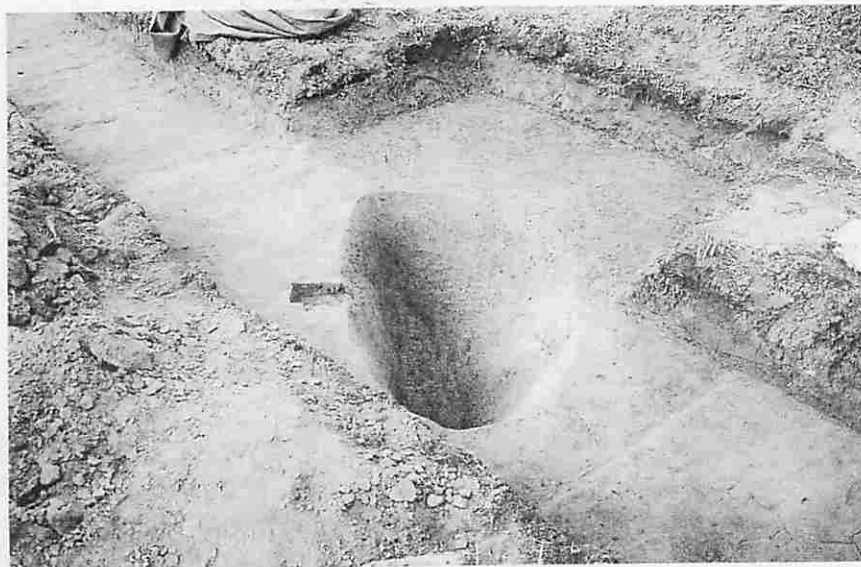
市指定・神吉八幡神社祭礼絵巻



県指定史跡・西条廃寺



県指定・沙弥教信頭像(教信寺)



弥生時代後期の穴

山之上遺跡は、国指定史跡大中遺跡に隣接する位置にあります。1962年に浅原重利氏によって発見されました。

1976～77年に潰目池の確認調査が実施され、ナイフ形石器など多数の石器が発掘されました。今回、範囲確認調査が実施されることとなり、住吉神社南西側の水田と隣接する造成地で、150平方㍍の調査が実施されました。

その結果、弥生時代後期の穴や溝などが発見されました。穴は、いびつな楕円形で長さ1.6㍍、幅0.8㍍、深さ0.6㍍でした。ここから、弥生時代後期の壺破片や高坏片、イダコ壺などが出土しました。溝は幅1.2㍍、深さ0.38

山之上遺跡発掘調査

㍍、確認した長さ4.6㍍で、ここからも弥生時代後期の土器が発見されました。また、時期不明ながら、加工痕跡のあるサヌカイトの石片も1点発見されました。

出土した土器は、隣接する大中遺跡と同じ時期であることから、この遺跡は大中遺跡の範囲の一部と考えられます。



国指定史跡・行者塚古墳



重文・絹本著色聖徳太子像（鶴林寺）



市指定・三十六歌仙図絵馬紀貫之（泊神社）



加古川市文化財保護協会

各700円

購入ご希望の方は『教育委員会生涯学習推進室』（新館8階）へ

加古川市内には数多くの文化財があります。

私たちの祖先の文化遺産が、社会開発と生活様式の変化に伴い、消滅の危機にさらされています。

文化財に関心のある方！

加古川市文化財保護協会に加入しませんか

保護協会は、これらの文化財（有形・無形・民俗文化財・記念物）ならびに自然風土を保護し、これらに関する研究とその知識の普及をはかり、市民文化の向上に資することを目的に、昭和51年11月13日に結成されました。そして、文化財見学会、講演会の開催、文化財説明板の設置や文化財テレホンカードの発行などを通じて、文化財保護の活動を積極的に展開しています。保護協会で加古川の文化財の再発見をしてみませんか。

会費 年間2000円

（中・高校生1000円）

◎文化財シリーズ・テレホンカード配布

◎文化財見学会・文化財講座の案内

保護協会入会のお問い合わせ

加古川市教育委員会
生涯学習推進室

☎ 27-9349



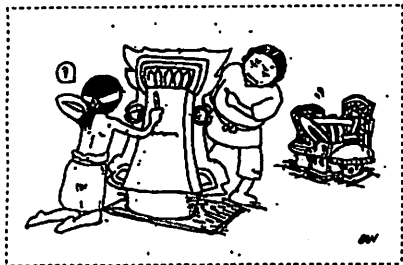
文化財紹介

靱形埴輪とは、武器の矢を入れる「靱」という武具をまねて作った埴輪です。矢を入れる筒の部分（矢筒部）と、背負う板の部分（背負板または背板・飾板）に分かれます。実際の靱は布や革、木で作られ、漆や複雑な編み込みによって豪華に飾られています。靱形埴輪も、同じように直線や曲線を組み合わせた複雑な文様（直弧文）や、いくつも重なった三角形を並べたような文様（鋸

靱形埴輪とは？

どなたが作っていたのでしょうか？

では、ちょっと近づいて見ましょう。行者塚古墳の靱形埴輪は表面の風化が少なく、埴輪を作った人（工人）が指でなでた跡や、線を一度描いてから消した跡などがよく残っています。右の背負板の裏面には、形を整えるために指でなでた跡がたくさんあります（裏面図の右）。その指の幅は8ミリのほどで



すから、作ったのは大人の男性でしょうか。また、背負板に描かれている5本の鉄の矢じり（鉄鏃）は、よく見るといちばん左と左から2本目の矢じりが重なり合っています。土のゆがみ具合から、右から順に描いていることがわかりますので、作った人は左から2本目まで描いたときに残りのスペースが狭いことに気がついたものの、強引にいちばん左の矢じりを重ねて描いてしまっています。けっこういい加減な作り手だったようですね。



歯文）などがふんだんに描かれています。

靱形埴輪は、盾形埴輪・蓋形埴輪・甲冑形埴輪といった器財埴輪とともに古墳の上に並べられ、埋められた王を古墳の外の魔物から守る辟邪という役割をもっていたと考えられています。

行者塚古墳の靱形埴輪

行者塚古墳では、多くの器財埴輪とともに靱形埴輪の破片が出土しております。そのうち、復元できたのは1995年に調査した北東造出のものです（図参照）。盾形埴輪と同じく粘土槨の東側から出土しました。大きさは高さ129.5センチ、横69センチ、奥行き29.3センチ（数値は推定復元）で、背負板が上と側面につきます。部分的に黒い斑点があることから、高温で焼く窯ではなく低温の野焼きで焼いたことがわかります。また一部に赤い顔料を塗った跡があります。図の背負板は、上へ花開くような形をしており、中央には鋸歯文と綾杉文で飾った幅約4センチ、厚さ8ミリの突帯（土の帯）で半円形の区画をつくり、その中を同じ形に5ミリほど盛り上げて、

中に鉄鏃を描いています。

側面の背負板には、非常に珍しい文様が描かれています。中ほどに見える波のような文様は靱形埴輪でよくみられるものですが、その上の二重円形文は通常より大きく、最下部は山形文を描いた突帯によって、半円形をさらに真ん中で縦に割ったような形に区切り、内側に突帯と同じ形の線刻を描い

ています。このような形の背負板や円形文は他に例がありません。

表面は一度細かなハケ（くしで引いたような模様がつく工具）で整えたあと板のような工具でナデで仕上げています。上や側面の背負板の裏も、縦方向や横方向に丁寧にナデしています。本体を支える裏の円筒部は、残った破片から推定すると7段の突帯を持ち、外面は幅1センチあたり、10～16本のきめ細かなハケを縦方向に施しています。内面はナデによって仕上げ、厚さ7ミリほどで非常に薄手です。このように、行者塚古墳の靱形埴輪は崩れかけた古い要素をもつと同時に特殊な要素が多く見られるという、古いものから新しいものへと移り変わるちょうど過渡期に位置するものです。さらに工人の細かな製作のようすまで観察できる点で、非常に興味深い資料といえます。

（忽那敬三 イラスト/BAN）

